

も怠ることがなかったとされている。真偽はともかく八十二歳祐天と記された名号も現在まで伝えられており、また祐天寺には老齢のためか多少線が震えている名号が残されていることも事実である。祐天の臨終にふさわしい描写と言えよう。

そして、弟子祐海に対して、不断念仏堂の創営を遺言した。この遺言に対し、また將軍家の祐天に対する信仰というものが具体的に表れてくるのである。この祐天寺の起立に關してはまた別の機会にまとめることとしたい。

臨終の瑞相として描かれていることは、「異香」が満ち、この夜は「清明風輟雲歛天高月朗」であつた。「不<sub>レ</sub>告<sub>ニ</sub>自知<sub>ル</sub>来<sub>テ</sub>集<sub>スル</sub>者<sub>タ</sub>亦<sub>タ</sub>衆<sub>ナリ</sub>多<sub>ク</sub>也」と言うように人々が集まつてきたと言う（『略記写本』）。

#### 第六項 葬送

十六日に遺骸を椅子に乗せ、來衆の徒に拝せしめ、十七日に葬儀式を行った。葬儀は白隨大僧正導師のもと、数百の僧侶が威儀厳重に行われた。そして、最も祐天を送るにふさわしい描写が、「群集老幼無<sub>レ</sub>貴無<sub>レ</sub>賤触<sub>レ</sub>烟<sub>ニ</sub>而結<sub>ス</sub>縁<sub>之</sub>」（『略記写本』）であらう。

茶毘所は「於<sub>テ</sub>集<sub>ル</sub>増<sub>ス</sub>上<sub>ノ</sub>寺別墅<sub>ニ</sub>」〔割注〕在<sub>リ</sub>白<sub>ニ</sub>金<sub>ニ</sub>村大崎<sub>ニ</sub>去<sub>コト</sub>龍<sub>ヲ</sub>土<sub>ニ</sub>未<sub>レ</sub>遠<sub>カ</sub>也」（『実録下書』附）、いわゆる下屋敷、今の品川区上大崎付近である。茶毘のあと、「得<sub>タリ</sub>舍<sub>ニ</sub>利<sub>」</sub>〔割注〕衆色<sub>」</sub>数百

類<sup>ツ</sup>於<sup>ニ</sup>遺燼之中<sup>ニ</sup>又舌根<sup>ニ</sup>割注<sup>ス</sup>白色<sup>ニ</sup>而有<sup>リ</sup>光形<sup>ニ</sup>如<sup>シ</sup>二葉蓮華<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>爛<sup>シ</sup>宛然<sup>ト</sup>在<sup>ニ</sup>灰中<sup>ニ</sup>〔略記写本〕とある。

この舌根が焼け残るという話は『略記写本』では「多年称名之功一生不<sup>レ</sup>虚誑語之徳」と説明している。ところが、「大智度論」(九、『正蔵』二十五、一二七 a)には阿弥陀仏経を誦するがゆえに「舌不<sup>レ</sup>焼」とあり興味深い。

茶毘に付された祐天の舍利は、祐海によつて創建された祐天寺と増上寺の廟所ならびに菩提寺最勝院にそれぞれ埋骨された。

さらに『略記写本』によれば、祐天の等身大の影像が造られた。現在祐天寺の本堂に納められているものがそれである。この祐天の像は現在調査中であるが、近世の僧侶しかも祖師でもない僧侶としては考えられないほど多く造られ奉納されている。現在のところを記すと、最勝院・新妻家・水海道市法蔵寺・祐天寺・松阪市清光寺・松阪市西方寺・多気郡宝泉寺に確認されている。まして、その画像や名号まで入れればその遺跡は計り知れないものがあることは言うまでもない。

#### 第七項 祐天の臨終を巡る験益

「浄土本」の伝記にも名号の功德、祐天の檀度の功をはじめ靈瑞・奇瑞を載せ祐天の徳を